

漢字圏としてのベトナム (ハノイ)

ASEAN の一員であり、現在はアルファベットをもとにした文字を国語に用いていることから、漢字とベトナムの関係に気づく日本人は必ずしも多くない。しかし、古くからの多様な交流を通じて中国の影響を大きく受けた結果、ベトナム語には、漢字を語源とした漢越語と呼ばれる種類の単語が多数ある。表 1 は、そうした単語の一部をまとめたものである。

ベトナム語	カタカナ表記	対応する漢字	意味
chú ý	チュイー	注意	精神を集中する 注意する
cô độc	コトック	孤独	孤独の 一人ぼっちの
kim ngạch	キムンガック	金額	売上高
kỳ vọng	キーヴォン	希望	期待する 希望する
ký túc xá	キートックサー	寄宿舎	宿舎、社宅 寄宿舎
lễ nghi	レーンギー	礼儀	礼儀
mãn khai	マンハイ	満開	花が咲きそろそろ 満開
mệnh lệnh	メンレン	命令	命令
nội các	ノイカック	内閣	内閣
phán quyết	ファンケット	判決	判決 (を下す)
phản cảm	ファンカム	反感	反感 (を抱く)
phản đối	ファントイ	反対	反対する

表 1：ベトナム語における漢越語の一例

一読いただくと、カタカナによって示したベトナム語の発音と、対応する漢字の日本語の読み方が似通っているものが多いことにお気づきではないか。こうした、漢字に語源を有する単語は、ベトナム語の単語全体の約 7 割を占める。

表 1 では漢字 2 文字または 3 文字の単語を紹介したが、日本語に漢字の音読み・訓読みがあるように、ベ

トナムにおいても漢字の一つひとつに対応した、いわば「漢字のベトナム語読み」がある。表 2 は、そうした「漢字のベトナム語読み」のうち、日本語の読み方に近い一例を紹介している。

漢字	対応するベトナム語	ベトナム語による読み方のカタカナによる表記
期、奇	kỳ	キー (声調は「下がる」)
記、寄	ký	キー (声調は「上がる」)
紀	kỷ	キー (声調は「尋ねる」)
技	kỹ	キー (声調は「倒れる」)
官、関、観	quan	クワン
太、態、泰	thái	タイ

表 2：漢字のベトナム語読みの一例

中国語と同様に、ベトナム語にも声調と呼ばれる音の抑揚が母音にあるため、カタカナでは一様に「キー」と表した発音も、「kỳ」「ký」「kỷ」は正確にはすべて異なる発音となる。しかしながら、「期」「奇」「記」「寄」「紀」と、いずれも音読みで「き」と発音する日本語の漢字を念頭に置きながらこれらの文字を眺めると、日本と同様の漢字圏にベトナムが位置していることが理解しやすいのではないかな。

表 3 は、日本でも馴染みがある中国語の固有名詞について、ベトナム語の読み方を記したものである。

中国語	中国語の読み方	ベトナム語の読み方	カタカナ表記ベトナム語の読み方	日本語の読み方
習	Xi	Tập	タップ	しゅう
近平	Jin Ping	Cận Bình	カンビン	きんぺい
北京	Bei Jing	Bắc Kinh	バックキン	ぺきん
上海	Shang Hai	Thượng Hải	トゥオンハイ	しゃんはい

表 3：中国語の漢字のベトナム語読み

英語をはじめ、世界中の多くの言語ではこれらの固有名詞を表現する際、例えば中国の最高指導者を Xi Jinping (シージンピン) と表現するように、中国語の

発音の表記をそのまま用いる場合が多い。それに対し、ベトナム語では、漢字の一文字ずつに当てられた独自の漢字の読み方を用いて、中国語の固有名詞を表現するため、「習近平」は「タップ カン ビン」、「北京」は「バック キン」となる。さらに、日本語においても「シャンハイ」と中国語に近い発音を採用する「上海」もそれぞれの漢字の独自の読み方を忠実に当てはめ「トゥオン ハイ」とベトナム語は表現してしまう。

いかがだろう、これまで「独自の漢字の読み方」という観点からベトナム語の特徴を解説してきたが、同じく独自の漢字の読み方を有する日本語を用いられる皆さまが本論を通じ、ベトナム語への興味をほんの少しでも持っていたければ幸いである。

(ベトナム日本商工会 事務局長 安藤 憲吾)

※参考文献

岩月純一(2005) 「近代ベトナムにおける「漢字」の問題」
『漢字圏の近代』東京大学出版会
川本邦衛編(2011)『詳解ベトナム語辞典』大修館書店

公開ビッグデータの信用情報活用を（北京）

3月5日に開幕した第12期全国人民代表大会(全人代。国会)第5回会議において、李克強総理は「政府活動報告」の中で、2017年の経済成長目標を昨年実績の6.7%からさらに引き下げ6.5%前後にすると表明した。メディアの反応が気になったが、“実態に即した現実的な目標を設定し、経済の安定運営を優先した”との冷静な報道ぶりが多かったように思う。わずかな数字の動きを話題にしていた近年の状況から見れば落ち着いたものだ。

ところで、そうは言っても中国でビジネスをするのは難しい。法令や規則、運用が急に変わる。気付かないうちに変わっていることもある。税金関連なら何年も遡って新税率(多くは上昇)が適用され、滞納金や下手をすると罰金まで払わざるを得ない状況に直面したりもする。当商会では会員への情報提供・共有のほか「白書」を通じた意見具申を行うなどしているが、追いつかない現実もある。

また、中国進出の外国企業(香港、台湾は除く)について言えば、日本企業は数が多く根付いているようにも見えるのに、まだまだ労務上の問題に悩む企業が少なくない。企業側が中国の文化・社会の特質を理解することが重要なことは論を待たないが、ナショナルスタッフ(現地社員)にも逆に日本の特性を理解してもらうよう積極的に意思疎通を図るべきだ。どちらか一方だけに合わせる必要はない。目標と手段を社内で共有すること、これは日本で普通に実践すべきとされていることであろう、何も特別なことではない。

社内の情報と人材を固めたら、次は外、商売相手が気になるところだ。民間の信用調査会社や銀行などから情報を集めるのが一般的だろうが、最近中国では、なかなか優れたものの情報ソースが生まれてきている。中国政府が構築に力を入れている巨大なビッグデータだ。中国にいれば、何でもかんでも情報を取られて一元管理されていくという一種の“空恐ろしさ”を感じる場合もあるが、一方で、それを活用する側に立てば、かなりの量の信用情報を得られビジネスに生かせるというわけだ。

「信用中国」、「中国税関企業輸出入信用情報公開プラットフォーム」などが既にネットで公開されている。

信用情報プラットフォーム「信用中国」

<http://www.creditchina.gov.cn/>



企業の税関信用等級や行政処罰の状況を閲覧できる

「税関信用情報プラットフォーム」

<http://credit.customs.gov.cn/>



日系企業を含め優良可の評価が出ている。何と言ってもブラックリスト掲載の多さに驚く。今後情報量が充実してくれば、商売相手見極めに大いに役立つだろう。

「老頼(ラオライ)」。中国で、借金を踏み倒す者を指す。代金を払わない企業なども含む概念だ。もとより企業は商売の主体である以上、債権回収ができなければ話にならない。近年悪質な老頼が跋扈しているようで、しびれを切らした政府が全国の裁判所の情報を集めて2013年に「信用喪失被執行人データバンク」を開設した。いわば“老頼ブラックリスト”だ。既に700万人近い登録があるとの報道も見られる。

今後、膨大なビッグデータを基礎とする信用情報が企業の強い味方になりそうだ。

(中国日本商会 事務局長 五十嵐 克也)